

学部教育と図書館

野原 義次

今次の大学紛争において、学生諸君の問題提起は「大学における研究偏重および教育不在」である。ことに古い大学の教育体制が新しい情報時代の教育に即応できなくなったことは明白であり、現在、大学人は新しい大学像への模索をつづけている。この時期に大学の図書館もまた脱皮の時期にあるはずである。

一体大学の図書館の意義は何であるのだろうか。今までの図書館のあり方は研究の面にその焦点を置き、教育の面からは、それほどの配慮が払われていなかったのではないか。学生が自主的に修練する場としての十分の設備ができており、いい得るであろうか。ことに医学部においては基本的知識の修得が不可欠であるが、1学年100余人の学生に対して見合う程度の図書の備付があったであろうか。また学問の発展、細分化により、学生の修得すべき事項の増加に伴い、単に印刷物のみでなく、教育技術として発達せる種々の学習装置の設備が考慮されていたであろうか、等々数えあげて見ると、学部教育から見た図書館のあり方ということについては、われわれ反省せねばならぬ点があまりに多い。もちろん、医学部においては新しい図書館ができて以来、これらの点はある程度改善されてきてはいる。

しかし、一層根本的なことは、少くとも医学部の図書を見わたすと、医学部教育それ自身についての図書および資料が誠に貧弱ということであり、医学教育に対する関心の貧困さを如実に感ぜさせられるのである。教育改革は大事業であると考え、世界的視野に立って、自からの道を見出す他はないものとする。

さらに研究の面から考えても、改革の余地は多々残されており、またこれらの改革に伴い、事務機構の改善も、当然考慮にいれねばならぬ。

図書館機能の改善、発展は大学改革の一環としてあるべきである。用意周到に検討、計画された教育および研究改革に基づいて、図書館の改革も行なわれるべきである。それがためには各種改革委員会と平行して、図書館改革委員会が各学部において強力かつ密に活動に移されるべきであろうと考える。

(医学部助教授)